

〈資 料〉

今はまだ人生を語らず

——《吉田拓郎》が描く「生」の継続——

Our Life shouldn't be Talked about yet now :
Continuation of the "life" which "Takuro YOSHIDA" draws

諸 井 克 英
(Katsuhide MOROI)

はじめに

《吉田拓郎》は、'70年にエレクトレコードから「イメージの詩」(作詞・作曲：よしだたくろう；B面はマークII)〈A〉でシングル・デビューし、多くの楽曲を生みだし、第一線の音楽アーティストとして走り続けている。本稿では、'60年代末の若者が創出した反権力運動としての関西フォークの流れ(諸井, 2015参照)と一定の距離を置きながらも今なお活躍し続けている、《拓郎》の想いを「生きることに対する態度」という観点を軸にして論じよう。

《拓郎》の轍

まず、《拓郎》のこれまでの歩みを簡単に確認しよう(シンコーミュージック, 2007)。《拓郎》は、'46年に鹿児島県・大口市(現・伊佐市)で生まれたが、両親の別居に伴い小学3年次に広島市に転居した。高校時代(県立皆実高校, '62年入学)から音楽活動(ロックバンド「トーン・ダイヤモンド」)に従事し、進学した広島商科大学('65年入学；現・広島修道大学)ではバンド活動に加え(「ザ・パチャラーズ」, すぐに解散)、弾き語りのソロ活動も行った。

《拓郎》は、'66年にはコロムビアレコード主催のフォークコンテストで全国3位となった。その後、再びバンドを結成し('67年「ダウタウンズ」), '68年の第2回ヤマハ・ライト・ミュージック・コンテストのヴォーカル・グループサウンズ部門で全国4位の地位を得た。《拓郎》は、'68年末に結成されたアマチュア・フォークサークルの「広島フォーク村」に参加した。この「広島フォーク村」は、'70年に自主制作アルバム「古い船

をいま動かせるのは古い水夫じゃないだろう」を発表し、《拓郎》の「イメージの詩」はもともとこのアルバムの1曲目に収録されていた。

《拓郎》は、'70年にエレクトレコードに所属するが、'72年には「CBS ソニー」とアーティスト兼プロデューサー契約を結び、「結婚しようよ」(作詞・作曲：よしだたくろう)〈B〉がオリコンチャート3位となった。これにより、彼は、フォーク・ファンにとどまらず全国的な知名度を得た。その後、アーティストによる自由な創作活動を保証するために、《拓郎》に加え、「井上陽水('48年生～)」、「泉谷しげる('48年生～)」、「小室 等('43年生～)」の4人で、'75年にレコード会社フォーライフレコードを創設した。'99年に専属契約を解消し、'00年にインペリアルレコードに移籍したが、'09年には業界超大手のavexに移り今に至っている。

青年は何を目指したのか

Keniston (1960)によれば、青年期の特徴は、既存システムの決定的な拒絶にあるのではなく、自己と社会の間の関係をめぐるアンビバレントな緊張状態(既存の社会システムを受容するか、拒絶するか)にある。わが国では、この「青年による異議申し立て」の構図に従い、'60年代末に青年による反権力運動が起きた。この運動と連動して、「関西フォーク」に代表されるように、音楽アーティストが自らの想いをそのまま聴き手に伝達することが当たり前になった(諸井, 2015参照)。先述したように、《拓郎》はそのような時代の中で「関西フォークの流れ」と一定の距離をとりながら、音楽アーティストとしてのアイデンティティを確立した。

初期の代表作である「イメージの詩」〈A〉では「実に素朴なメロディー・ラインに単純なギター伴奏をつけ

て、心に浮ぶ社会や人間のイメージをまさに心のままに歌いあげていくのである」(浅沼, 2007)。大人社会への不信(「これこそはと 信じれるものが この世にあるだろうか」)、同輩との表面的同調(「いいかげんな奴らと 口をあわせて 俺は歩いていたい」)、孤独感(「長い長い坂を登って 後を見てごらん 誰もいないだろう」)などの青年期特有の心性が列挙され、未来に向かう意志が示されるのである(「古い船を 今 動かせるのは 古い水夫じゃないだろう なぜなら古い船も 新しい船のように 新しい海へ出る」)。

《拓郎》は、'71年に開催された「中津川・フォーク・ジャンボリー」のサブ・ステージで六文銭とともに「人間なんて」(作詞・作曲:よしだたくろう)〈B〉を延々と唄い続け、それまでの「関西フォーク」中心の流れに対峙する存在として認知される。「サブステージでの歌い手と聴く側の一体感、盛り上がりは物凄いものがあった」のだ(なぎら, 1999)。これを機に《拓郎》は「ナショナル・ブランド」(山本, 2008)になった。この「人間なんて」では、アイデンティティの拡散(「何かが欲しい オイラ それは何だかは わからない けど何かが たりないよ いまの自分もおかしいよ」と未来への不安(「空に浮ぶ雲は いつかどこかへ 飛んでゆく そこに 何かが あるんだろうか それは誰にもわからない」)が反復して表出されるという特異な歌である。

先述したように、《拓郎》は、「CBS ソニー」移籍後すぐに発表した「結婚しようよ」が大ヒットし、全国的知名度を得た。しかし、この商業的成功は、デビュー以来のファン層によって社会への迎合という批判を浴びることになる。しかし、この歌は、当時はまだ主流であった家同士の結びつきとしての結婚から自由な恋愛の結果として結婚への誘いなのである(諸井, 2003)。つまり、結婚を「社会的束縛」から解放し、「個人化」したのである。「僕の髪が「もうすぐ肩まで とどく」から結婚するのであり、その結婚式には仲間がいれば十分なのである(「仲間を呼んで 花をもらおう」)。さらに、'74年に《拓郎》は、演歌の大スターである「森進一('47年生〜)」に「襟裳岬」(作詞:岡本まさみ/作曲:吉田拓郎)を提供した。この歌は第16回レコード大賞を獲得し、《拓郎》に「歌い手」というブランドに加え、音楽アーティストとしてのブランドも与えることとなった。その後も《拓郎》は所謂アイドルなどにも楽曲を提供し(例えば、「キャンディーズ」〈'72~'78年)に「やさしい悪魔」〈'77年;作詞:喜多条 忠/作曲:吉田

拓郎)」、歌謡曲やフォーク系などの様々な音楽ジャンルの境界を融解させた(田家ら, 2014, 225-263頁参照)。

今はまだ人生を語らず

《拓郎》が今までに出した歌での主題は幅広いが、本稿では、彼が折々もち出す「生」の継続について論じよう。

《拓郎》の初期の作品である「今日までそして明日から」(作詞・作曲:よしだたくろう)〈A〉は、先述した'60年代半ばからの青年による異議申し立てとして権力への反抗が衰退と挫折をした時期に現れる。そこでは、他者との様々な関係性の中で生きてきた自分を前提に(「わたしは今日まで生きてみました」「時にはだれかの力をかりて」「時にはだれかにしがみついて」「わたしは今日まで生きてみました」)、「生」の継続が唱導される(「明日からもこうして生きて行くだろうと」)。未来は不確定であっても(「それにしたって」「どこで どう変わってしまうか」「そうです わからないまま生きてゆく」)、相変わらず生き続けるのだ。この歌は、'70年初頭の青年が直面した時代の転変に対する「生」の継続という《拓郎》の意思表示なのである。

'74年には CBS・ソニーから「襟裳岬」も収録されたアルバム『今はまだ人生を語らず』〈C〉が発表される。このアルバムはその完成度から《拓郎》のアルバムの中で最高傑作と言われているが、実は収録曲の「ペニーレインでバーボン」(作詞・作曲:吉田拓郎)の歌詞の一部(「テレビはいったい誰のためのもの」「見ている者はいつもつんぼさじき」)が問題視され「自主規制」される。その後、このアルバムは一端 CD 化されるものの、現在では市販されていない。

このアルバムのコンセプトを代表する「人生を語らず」(作詞・作曲:吉田拓郎)では先の「今日までそして明日から」と同じ想いがさらに力強く展開される。'70年初頭に挫折と敗北を経験した若者に対し、威勢よくメッセージを叫ぶよりも「臆病者」という烙印を怖れる必要はない(「空を飛ぶ事よりは 地をはうために」「口を閉ざすんだ 臆病者として」「目の前のコップの水を ひと息にのみほせば」「傷もいえるし それからでもおそくはない」)。なぜならば、まだ見ぬ未来に向かってまた飛び立てばよいのだ(「目の前にも まだ道はなし」「越えるものは すべて手さぐりの中で」「見知らぬ旅人に 夢よ多かれ」)。つまり、過去に囚われるのではなく、「人生の途中であること」を自覚すべきなのだ(「越えて行け そこを」「越えて行け それを」「今はまだ 人生を 人生を語らず」)。

この歌では、「今日までそして明日から」でのメッセージの根幹をさらに人生という枠組みに拡大される。人生の構築途上にある者は、「人生」という言葉で過去を振り返るべきでない。人生とは「生」の継続の結果であり、その結果に今固執（回顧）することは、「今日までそして明日から」で唱導された「生」の継続への動機づけ高揚を妨げることになるのだ。

ところで、《拓郎》によるこのような対人生態度を「時間的展望」という心理学的概念から捉えてみよう。時間的展望とは「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(Lewin, 1951)であり、Lewinは、青年期の特徴として時間的展望機能の活性化を指摘している。《拓郎》は、子どもと大人との間に挟まれた曖昧で不安定な人生上の位置におかれた青年に、過去に回帰せず未来志向を活性化することによる今の不安定さの克服を説いているのである。これは、今なお活躍し続けるロックバンドの歌詞分析の試みによって諸井(2005)が検出した特徴と一致する。

しかしながら、中年期になると人生に対する考えが変化する。つまり、「生まれてからの時間」よりも「残されている時間」を重視するようになり、時間的展望の再編成が生じるのだ(白井, 1997)。《拓郎》の場合にもその再編成が起きた。新潟県・吉田町の「町おこし」イベントをきっかけとした「吉田町の唄」(作詞・作曲：吉田拓郎)〈E〉では、「拓郎自身のヒストリー」が「ちょっと離れた位置から描写」される(館野, 2008)。「家族や故郷という舞台」を歌いながら、《拓郎》自身の「生い立ちや成長」(田家, 2014)が語られる(「のびやかに しなやかに 育てよ 子供」「やがて 大地 踏みしめ 太陽になれ」)。40代半ば過ぎた《拓郎》は、自身の人生の流れが家族や故郷を媒介としていることへの気づきが明確に芽生え始めたのだ。

「ウルフルズ」の「トータス松本」は、「僕の人生の今は何章目ぐらいだろう」(作詞・作曲：トータス松本)という楽曲を《拓郎》に提供した。この歌は、《拓郎》の26枚目のオリジナル・アルバムである『Hawaiian Rhapsody』〈F〉に収録されており、'04年に発売されたライブ・アルバム『豊かなる一日』〈G〉でも聴くことができる。

先述した過去を振り返らず未来を見据えて「生」の継続を図るという《拓郎》の唱導が、青年を通り過ぎ'50代を越えた《拓郎》に適切であるかを「トータス松本」は問いかけたのだ。

この歌は、人生位置への確認から始まる(「今はどの

辺りだろう」「どの辺まで来ただろう」「僕の人生の今は何章目ぐらいだろう」)。さらに「今日までそして明日から」や「人生を語らず」での過去回帰に関する否定的態度と対照的に過去経験が回顧される(「忘れたい 昔の事」「ゆずれない 初恋の事」「わからない あの出来事」「しょうもない 昨日の事」)。そして、自分の残された未来へのこだわりが告白される(「いつまでも 凶々しく」「どこまでも 明日はつづく」)。つまり、中年期以降の人生の向き合い方が「トータス松本」によって唱導される。「残された未来」に向かう動機づけ高揚のために、自らの過去の振り返りを伴う「人生位置」の確認が必要なのだ。しかしながら、もともと《拓郎》によって唱導された無前提の「生」の継続という考えは、この「トータス松本」の歌にも継承されている。

人生を語ることから「生」の継続へ

'03年春の《拓郎》57歳の誕生日、「癌」を言い渡された。5月からのツアーを前の定期検診で「肺腫瘍」が認められすぐに手術となった。もちろん、ツアーは延期となり、「呼吸器系の、それも肺を冒されて復帰した例」(田家, 2004)は見当たらないという、歌手手としての危機的状況におかれる。しかしながら、《拓郎》は、過酷なりハビリテーションを経て、半年後の10月には「東京国際フォーラム」のステージに立ち、「今日までそして明日から」から「人生を語らず」までの22曲を歌い切った(田家, 2004)。しかし、'07年のツアーの序盤で、慢性気管支炎と胸膜炎のため、再びツアーは中断される(田家ら, 2014)。その後、先述したように'09年、コンピューター音楽(いわゆる打ち込み系ミュージック)で巨大音楽産業と化したavexに移籍した。この誰もが予想しなかった移籍は、エレックというマイナーレーベルから出発した《拓郎》による「音楽ビジネスの中の夢の続き」(田家ら, 2014)なのかもしれない。「そろそろ最後の時がきているんじゃないか」(田家ら, 2014)という彼の想いと超メジャーレーベルへの移籍による安定的な音楽活動の確保が交差したといえよう。

6年間のブランクを経て'09年に発売された30枚目のオリジナル・アルバム『午前中に…』〈H〉では、復活した《拓郎》の人生に対する態度の変容が披瀝される。例えば、「ガンバラナイけどいいでしょう」では、未来に突き進むことへの唱導は影を潜め(「求める愛が遠くても近くても」「進んでいだけが自分と思ってた」)、それぞれのゆったりした歩みが肯定される(「でも がんばらないけどいいでしょう」「私なりって事でいいでしょう」「がんばらなくてもいいでしょう」「私な

りのペースでもいいでしょう)。そのためには、懸命に未来に向かって行くのではなく（「明日に向かって走れこぶしを握りしめて」〈「明日に向かって走れ」（作詞・作曲：吉田拓郎）〈D〉〉、ゆったりとした歩みでよいのだ（「歩こうか 歩けるネ」「歩こうか 歩けるね」〈「歩こうね」〉）。重要なことは、《拓郎》は「生」の継続を相変わらず追求する（「旅を続けながら 答えを探すのだ」「それは人生という名の 謎だから」）。

しかしながら、新境地に達したアルバム『午前中…』発売に並行したツアー途中で慢性気管支炎の悪化のためにツアー後半は中止され、これが《拓郎》にとっての「最後の全国ツアー」（田家ら、2014）となった。この後、《拓郎》は '12年に『午後の天気』〈I〉を発表し、秋には関東地方限定のツアーで再び復活した。

『午後の天気』は、前作『午前中に…』での新たな境地をさらに深化する。人生の最終章を配偶者（「森下愛子」（'58年生～）、'86年結婚）とともにゆったりと過ごすことの大切さが堂々と開示される（「僕の道」：「この道を行けばいい」「星に向かって 歩いて行こう」「いつも君と一緒に」「足音を刻んで」/「昨日の雲じゃない」：「この虚しさを 突き抜けて」「きっと わかり合える 二人になれる」/「危険な関係」：「なぜだか今日はそれでも良くなった」「縛り合うよりも 緩やかでいい」「君と僕とのストーリー そんな気がしたよ」）。さらに、亡き父への尊敬の念も歌われる。《拓郎》の父親は鹿児島島の郷土史家であった。'55年に両親の別居に伴い、《拓郎》は、先述したように広島市に転居することとなった。「清流（父へ）」では、そのような父に対する想いを巡らされる。先述したようにツアーをも中断させた病は、《拓郎》自身が人生の最終章に立たされていることを否応なく自覚させ、心の中で自分自身のルーツを辿ることになる。父親に対する心理的葛藤の回顧と後悔（「この頃 やっと正直に」「愚かな自分を声にして」「時には 人目とはばからず」「無念の涙を流します」）を経て、《拓郎》自身の原点の1つがその亡き父親であることや、父親の慈しみへの回帰が吐露される（「今ここにいる僕は」「何処からやってきたのか」「これから何処へ行けばいい」「あなたに逢いたい」「あなたの声が聴きたい」）。

以上に述べた《拓郎》の変化は、突如直面した病が人生の到達点である死を《拓郎》に自覚させた結果といえよう。死に対する態度の心理学的測定を試みた丹下（2004）は、先行研究での諸知見を概観し、死に対する態度が発達段階によって変動すると指摘した。つまり、

青年期から成人期にかけて死に対する恐怖が増加し、成人中期において頂点に達する。その後、成人後期になると死に対する恐怖が低下する。また、丹下・西田・富田・安藤・下方（2013）は、青年期に抱かれる死に対する態度の構造（丹下、2004；中高生）と中高年者（40-79歳）の構造の同一性を探索的因子分析と確認的因子分析によって明らかにした（死に対する恐怖、死後の生活の存在への信念、生を全うさせる意志、人生に対して死が持つ意味、身体と精神の死）。また、男女大学生を対象とした別の研究では（浅本・小川・鈴木、2006）、死の不安に関する対処の6側面（充実、熟考、身体管理、受け入れ、感情表出、回避）が因子分析により抽出された。《拓郎》の変化をこれらの心理学的所見を突き合わせると、人生に対する死が持つ意味を背景として彼は生を全うさせる意志を自覚しながら（丹下ら、2013）、充実や受け入れという対処（浅本ら、2006）を発動させているといえよう。

おわりに

'14年には、《拓郎》にとって4枚目のセルフカバー・アルバム『AGAIN』〈J〉が発売された。アルバム最後に収められている「アゲイン（未完）」（作詞・作曲：吉田拓郎）では「まだ終わらないという68才の今の気持ち」（田家、2014）が歌われる（「心は安らいでいたでしょうか」「希望の光を 浴びていたでしょうか」）。さらに、'16年秋から関東近郊限定であるがツアーが開始される。《拓郎》のゆったりとした歩みはまだまだ継続され、人生最終章の拡大が図られていくのである。

〈付記〉

《吉田拓郎》の歌詞の整理について板垣美穂さん（生活デザイン専攻修士課程2012年度修了）の助力を得た。記して感謝する。

引用文献

- 浅本有美・小川俊樹・鈴木伸一 2006 青年期におけるネガティブな反すが死の不安とその対処に与える影響 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 5, 6-15.
- 浅沼 勇 2007 ニュー・フォーク講座〈第5回〉『ヤング・ギター・クロニカル Vol.1 吉田拓郎これが青春』シンコーミュージック・エンタテイメント 44-46頁
- Keniston, K. 1960 Youth and dissent. 高田昭彦・高田素子・草津攻（訳）『青年の異議申し立て』1977 東京創元社

- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. Harper & Brothers. 猪股佐登留 (訳) 『社会科学における場の理論』1956 誠信書房
- 諸井克英 2003 『夫婦関係学への誘い-揺れ動く夫婦関係-』ナカニシヤ出版
- 諸井克英 2005 『ハイロウズの掟-青年のかたち-』晃洋書房
- 諸井克英 2015 『ことばの想い-音楽社会心理学への誘い-』ナカニシヤ出版
- 白井利明 1997 『時間的展望の生涯発達心理学』勁草書房
- シンコーミュージック 2007 『ヤング・ギター・クロニカル Vol.1 吉田拓郎 これが青春』シンコーミュージック・エンタテイメント
- 田家秀樹 2004 『豊かなる日々-吉田拓郎 2003 年の全軌跡-』ぴあ
- 田家秀樹・前田祥丈・菅 岳彦・池田 謙・村野弘正 2014 『アーティストファイル 吉田拓郎オフィシャルデータブック』TOKYO FM
- 丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, **15**(1), 65-76.
- 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子・安藤富士子・下方浩史 2013 中高年者に適用可能な死に対する態度尺度 (ATDS-A) の構成および信頼性・妥当性の検討 日本老年医学会雑誌, **50**(1), 88-95.
- 館野公一 2008 吉田拓郎の音盤『吉田拓郎読本』音楽出版社 73-109 頁
- なざら健彦 1999 『日本フォーク私的大全』ちくま文庫
- 山本コウタロー 2008 70年代以後の日本の音楽を大きく変えた永遠のチャレンジャー〈インタビュー〉『吉田拓郎読本』音楽出版社 64-68 頁
- [音源]
- 吉田拓郎
- A: 『青春の詩』FLCF-4011 〈'70年〉
- B: 『人間なんて』FLCF-4011 〈'71年〉
- C: 『今はまだ人生を語らず』SOLL-95-OD 〈'74年〉
- D: 『明日に向かって走れ』〈'76年〉
- E: 『吉田町の唄』〈'92年〉
- F: 『Hawaiian Rhapsody』〈'98年〉
- G: 『豊かなる一日』TECI-1057/8 〈'04年〉
- H: 『午前中に…』〈'09年〉
- I: 『午後の天気』〈'12年〉
- J: 『AGAIN』〈'14年〉

(2016年11月14日受理)